



待降節第 1 主日 (ルカ 21:25-28,34-36)

主はあなたを解放するために来られる

典礼暦が改まり、新しい一年が始まりました。主日（日曜日）の朗読福音もマルコ福音書を中心に組み立てていくB年から、ルカ福音書を中心に組み立てていくC年に切り替わります。朗読箇所から「このようなことが起こり始めたら、身を起こして頭を上げなさい。あなたがたの解放の 때가近いからだ。」を取り上げて、ご降誕への準備を始めることにしましょう。

土曜日の朝ミサで少し話したのですが、皆さんは引っ越しの経験があるでしょうか。私はこれまで少なくとも6回引っ越しを繰り返してきました。学生の身分から初めて赴任した浦上教会、2度目の助任司祭として滑石教会、初めての主任司祭として太田尾教会、2度目が馬込教会、3度目が浜串教会、田平教会が4度目の引っ越しです。

6回引っ越しして痛いほど分かったことがあります。大切なことはどれだけ荷物を減らせるか、ということです。初めのうちはとにかく空っぽにして旅立つ、それだけのために荷造りをしていました。ですから最初から必要ない物まで箱に詰めて新しい任地に送っていたのです。「ひょっとしたら必要かも知れない」ならまだ分かりませんが、絶対に必要ない、そんな物まで荷物の中にあっただのです。

徐々に分かってきました。「ひょっとしたら必要かも知れない物」これも、「必要ない物」です。こうして考えられる限り物を捨てたり誰かに譲ったりして、次の任地に向かう。それでいいのだと思えるようになりました。世の中の言葉で言えば「断捨離」ということになりますが、今週の福音朗読に当てはめて考えると、「解放の 때가近づいている」この呼びかけを思い起こさせます。

厳密に、福音朗読で取り上げている「解放の時」と訳されたギリシア語は、「代価を支払って奴隷を買い戻し解放すること、贖いの業」を意味する言葉です。それはまずはキリストの十字架、「御自分の血によって、人の罪を赦してください、そこに神の恵みが示された」この出来事のことです。さらに、イエスの再臨が、すでに始まった救いの出来事を完成させるための「解放の時」なのです。

イエスによる「解放の時」は、再臨によって完成されます。再び「解放の時」を迎えることで、完成です。私たちがキリストの再臨の時をふさわしく迎えるために、自分の身の回りにある体験で準備をするとよいと思います。私にとってその大きな出来事は時々繰り返される引っ越しです。

初めのうちは必要な物ばかり考えて荷造りをしていました。司祭として奉仕するために、これは必要、これも必要。ひょっとしたらこれも必要、息抜きのためにはこれも必要。このような物への執着から、「ひょっとしてすら、必要ない」と何度も執着から解放されて、新任の時よりも10年目、10年目よりも銀祝を迎えてから、金祝を迎えた時はなお

さら、奉仕に集中できるように造り変えられるのだと思います。

あくまでこれは自分自身の体験ですが、皆さんの中にも「解放の時」を何度か繰り返して、洗礼を受けたキリスト者としてふさわしくイエスを迎える姿に造り変えられる方法はあるはずです。ぜひ見つけて欲しいと思います。今回一つだけ、例を示しますので、よりご自分に合った方法で、私たちも身近な方法で「解放の時」を知り、ふさわしくイエスを迎える生き方に自分を近づけていくことにしましょう。

おそらく皆さんの中の多くの方は、時間は大切だと言うでしょう。時間があまりに大切なために、祈りをする時間すら惜しいと思っている人もいないでしょうか。たしかに起きている間目一杯活動すれば、充実感はあるかも知れませんが、ただそれが、救い主を迎える準備にうまくつながっているでしょうか。ここが問題です。

古い話ですが、畑作業をしながらも昼になったら「お告げの祈り」を唱えている時代がありました。私は長崎滑石教会の伯父さんに沖釣りに連れて行ってもらった時、「昼になったからお告げの祈りをしようや」と言われ、私が気にも留めていなかったことを恥ずかしく思いました。

こうして、作業中に祈りを唱えることで、畑仕事を神様の喜びに変え、趣味の釣りでさえも神様に向けることを忘れなかったのです。収穫第一、超過第一という執着から解放されて、神様の喜びとなることを第一にする人に造り変えられていったのです。

身近な祈りという手段で、私たちは自己愛の強い自分から解放されて、解放の時を待つことができるようになります。私にとって、今の生活と両立する解放の時の準備の仕方は何でしょうか。利己的な自分から解放される体験を積んで、決定的な解放の時を与えてくださる主を待つことにしましょう。

「放縦や深酒や生活の煩いで、心が鈍くならないように注意しなさい。さもないと、その日が不意に罨のようにあなたがたを襲うことになる。」(21・34) 幼子として救い主が到来するその日、準備を怠った人のように呆然として主を迎えることのないように、自分に合った準備を見つけ、準備を始めることにしましょう。